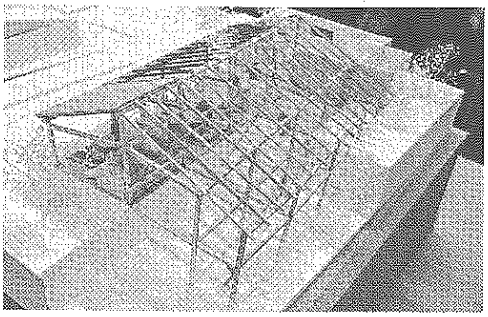
南あわじ市で「建築×合宿」

30大学104人が暮らし方提案

最優秀は8班「がらくたのある日常」

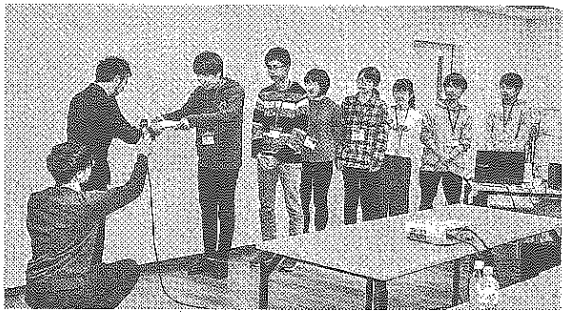
建築系学科で学ぶ全国の大学1、2年生が合宿しグループで一つの設計課題に取り組む「建築×合宿2019in淡路」（協賛＝総合資格学院）が2月26日～3月3日に国立淡路青少年交流の家（兵庫県南あわじ市）やフリースペース・類（大阪市淀川区）などで行われた。30大学から104人が参加。14班に分かれた学生らは、南あわじ市阿万（あま）の三つの敷地から課題の敷地を一つ選び、敷地調査を行うとともに議論を重ねながら作品を制作。最優秀賞には「8班」が提案した「がらくたのある日常」が輝いた。

全国から集まった学生が合宿を通じて学内にはない刺激を受け、お互いに高め合う機会を得ることを狙いとした企画で、今回で16年目。今年のテーマは「accelerator」。作品は「スケール」「おもさ」「記憶」から言葉を選び、生活のための空間を設計し取りまとめた。



最優秀賞の模型

初日に大阪市北区の関西大学梅田キャンパスで開会式を開いた後、一行は南あわじ市へ移動。班ごとに課題作品の作業に着手し、中間講評会（2月28日）を経て制作作業をさらに進め3月2日に作品を提出。3日に大阪市（フリースペース・類）に移動し最終講評に臨んだ。



最優秀賞賞状を受ける8班のメンバー

審査ではジュリスト（審査員）の五十嵐太郎氏（東北大学教授）、白須寛規氏（designSU）、畑友洋氏（畑友洋建築設計事務所、神戸芸術工科大学准教授）、宮城俊作氏（奈良女子大学教授）、延原直樹氏（LIB）が、作品の意図やポイントについて質問し、各班のメンバーが丁寧に答えた。

合宿参加メンバーら

最優秀賞の作品は、この地域の高齢者1人の新しい暮らし方を提案。「過去には大家族が住んでいたものの、今は若い人たちはここで生活をしていない」状況を踏まえ、大きな敷地に最小限の住宅をつくるとともに、地域での物々交換の場と、ごみ捨て場を計画。物々交換の場が活性化する機能も設定した。デザインについては、住宅と密接に結びついている小屋や蔵が地域に点在していることを踏まえ、「小屋的なものをモチーフにしつつ、周辺のボリュームになじむようにした」という。

この提案にジュリストは「全体的な組み立て方が優れている」「物々交換する時の会話が想像できる作品」などと高く評価。

8班のメンバーは「多くのジュリストに、この作品が個人的に好きだと言われたことが大変うれしかった」「提案が良いと評価いただいたのが印象に残っている」などと語っていた。

最優秀賞のほか、8班と獲得票で競った「13班」が白須賞を受賞。五十嵐賞に「9班」、畑賞に「6班」、宮城賞に「5班」、延原賞に「7班」が選ばれた。

8班のメンバーは次の通り（敬称略）。

▽川島史也（京都府立大）▽定真之介（関西大）▽小林拓海（大阪工業大）▽井上恵里（神戸芸術工科大）▽福永亜海（徳島文理大）▽神崎真歩（奈良女子大）▽山本敦紀（神戸大）。

川島さんと野田さんに優秀賞

京都建築学生之会 合同卒業設計展

京都建築学生之会23～25京都市で合同1om（特別など）

京都を志す学の枠っと1年で28「tr」に開き112作品が応募作品は昨年月たが、会場での作品展示は「見やすい」などの声が寄せられ、「議論も活性化した」との意見もあったという。

審査は期間中の3日間、異なる観点から実施された。23日に行われた審査では竹原義二氏（審査委員長）、西沢立衛氏、前田圭介氏、田根剛氏、小室舞氏の建築家5人が作品を審査。2次選考を通過した8作品の制作者がプレゼンテーションを行い、審査員が作品の意図などを質問、投票へ

2019年3月5日
日刊建設工業新聞